

歴史的真理か宗教的真理か

「新約聖書」は、キリスト教の信仰者にとっては究極の宗教的テキストであるが、それは同時に過去の歴史的テキストでもある。とくにその中の「福音書」の記述から、歴史的なイエスの姿を明らかにしようとなされるのが、イエス伝研究である。シュヴァイツァーは、『イエス伝研究史』(1906年、増補改訂1913年)において、18世紀後半から20世紀初頭のおよそ80種類のイエス伝研究を検討した。日本語訳で全3巻、一千頁を優に超えるこの大著の結論的考察で、彼は大胆に断言する。救世主として出現し、神の国の倫理性を宣教し、地上天国を創始し、その業に神聖さを与えるために死んだナザレのイエスは、決して存在しなかった、と。

シュヴァイツァーによれば、そのようなイエスの姿は、近代の理性主義や自由主義による神学的な拵え物に過ぎない。歴史的イエスは、現代の世界観とは全く異質な後期ユダヤ教の世界観の中に生きた道徳主義者 Moralist であり唯理主義者 Rationalist ともいうべき存在であった。彼は三位一体という言葉は一言も語らなかつたし、その生涯においてそのような教会教理など問題にもならない。イエス伝研究の成果は、何百年間も彼を教会教理に繋いでいた紐帯から、イエスを解き放つことができた。しかし、当のイエスはそこで立ち止まることなく、我々の時代を通り過ぎて、彼本来の時代に帰っていったのである。

歴史的研究というのは、本来そのようなものではないだろうか。歴史的研究を通じて明らかにされるのは、どこまでも歴史的真理である。イエスもまた、歴史的形姿を取って現れざるを得ない。では、歴史的真理はどこまで宗教的真理と関わるのであろうか。少なくとも、歴史的真理から信仰を築き上げることは不可能である。歴史学者にとって、「新約聖書」もまた歴史的文献だからである。歴史学の立場に留まるのであれば、それで良いかもしれない。

しかし、問題となるのは、キリスト教の信仰者が自らの信仰の営みの延長上で「新約聖書」を歴史的に研究した場合である。もともと信仰自体は、教会で説かれてきた教えに基づいており、それが宗教的真理だと受け取ってきたのである。

ここに、歴史的真理か宗教的真理かという「あれか、これか」が生じる。これに対して、最も安易な選択肢は、自らの信仰をぐらつかせないために、歴史的真理の探究を不要なものとして封印してしまうことであろう。あるいは、教会教理に抵触しない範囲内でのみ歴史的真理を部分的に承認することである。しかし、もう一つの勇気ある選択肢は、歴史的真理をも“不都合な真実”であると果敢に認め、宗教的真理のほうを教会教理の枠を超えて自らにおいて新たな形で受け取り直すことである。

“不都合な真実” 恐るるに足らず

シュヴァイツァーが取ったのは、そのような勇気ある選択肢である。彼は言う。歴史的イエスに対しては誠実な関わり方と同時に、自由な関わり方がなされなければならない、と。我々は、歴史にその正当性を与えつつ、我々自身を後期ユダヤ教的終末観というイエスの表象素材から解放する。その上でなおかつ残

るイエスの意志に我々自身の意志を従わせ、我々自身の時代の世界観の中で新たな生命と活動へと促すのである。

鍵概念は意志 Wille という言葉にある。というのも、シュヴァイツァーによれば、物事についての究極的かつ最深の知識は意志だからである。そして、このような意志から意志への神秘主義的な関わりこそ、彼による宗教的真理の理解であった。彼はこの立場を端的にイエス神秘主義 Jesumystik と呼んだ。イエス神秘主義は、「湖のほとりで、彼がなにびとか知らなかつた人々に歩みよつたように、イエスは我々に対しても見知らぬ者・名も無き者として歩み寄り、『私について来なさい』と、同じ言葉をかける…」という、『イエス伝研究史』の末尾で述べられるあの感動的な言葉の中に結晶している。

シュヴァイツァーにあつて意志が鍵概念であつたのと同じ意味で、キルケゴールもまた『哲学的断片』(1844年)の中で、信仰とは認識ではなく、自由の行為、意志の表明であると述べている。この書物は、「永遠なるものの意識にとって、歴史的な出発点はあるのか。いかにしてそうした出発点が歴史的関心以上のものを持ちうるのか。永遠の至福は歴史的知識の上に築くことができるのか」という問いに応答していく内容を持っている。永遠なるものの意識とは、宗教的信仰とも言い換えてもよい。

とすれば、ここでの問題は、歴史的真理と宗教的真理との関係はいかにあるべきか、ということにもなる。しかし、シュヴァイツァーと異なり、キルケゴールは真理を宗教的真理にのみ承認する。歴史的真理は、たとえそれを認めるにしても、真理らしきもの、あるいは真理の近似値であるに過ぎない。それは信仰と絶対に同類のものではない。宗教的信仰に歴史的出発点があるとすれば、問題の焦点はもはや客観的な真理にはなく、主体的真理としての信仰による逆説的な関わりにおいて見出される。そしてそこでは、罪の意識という新たな前提、瞬間という新たな決断などについての説明が求められることになる。

キルケゴールは、これらを論じるために『哲学的断片』のための「あとがき」を述べなくてはならなかつた。この「あとがき」にこそ、「主体性が真理であり、非真理でもある」という逆説的な宗教的真理の議論が、実存 Existents への問いというまきにキルケゴール思想の真骨頂をなす思想とともに展開されてくるのである。宗教的真理とは、人間が主体的実存に生きることと切り離すことはできない。この「あとがき」は『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』(1846年)として著されたが、シュヴァイツァーの『イエス伝研究史』と同じく、日本語訳で3巻本、一千頁を超える大著となった。

この著作については別な機会に取り上げたいが、私はここで最後に自分の考えだけを述べておくことにしよう。歴史的研究はたえざる真理への接近である。それはどこまで行っても、真理の近似値に留まる。それが歴史的真理の姿なのだ。どんなに歴史的(また実証的・文献的)研究を行っても、宗教的真理はびくともしない。そうでなければ、宗教的真理とは言えないではないか。それゆえ、どんなに史実や文献の上で“不都合な真実”が出てきても、我々は恐れることは全くないのである。